

60) CT 上指摘し得なかつた病巣が MRI にて描出された転移性脳腫瘍の 2 例

伊藤 靖・反町 隆俊 (立川総合病院)  
 亀田 宏 (脳神経外科)

転移性脳腫瘍は CT の普及に伴いその数は増加してきているが、必ずしも全ての症変が描出されるわけではなく、剖検にて CT 上認められなかつた病変をみることはしばしば経験される。今回我々は MRI にて CT 上とえられなかつた転移巣を描出し得た 2 例を経験したので報告する。

症例 1. 56 才男性。胃癌の診断をうけた後、頭痛にて発症した。CT では左後頭葉に大きな転移巣を認めたが、MRI ではさらに左小脳半球に小さな病変を描出し得た。手術にて左後頭葉腫瘍を摘出し、術後小脳も含めて全脳照射を行った。

症例 2. 56 才男性。構語障害にて発症。CT にて右前頭葉、右小脳、左側脳室内に腫瘍を認めたが、MRI では加えて左頭頂葉にも病巣を確認した。浮腫の強い右前頭葉腫瘍の摘出と外減圧を行った。組織所見は小細胞癌であった。現在全脳照射中である。

MRI の有用性と転移性脳腫瘍の治療について若干の考察を加える。

61) 頭蓋骨 Ewing 肉腫の 1 例

安藤 彰・清水 幸彦 (青森県立中央病院)  
 中村 公明・田中 輝彦 (脳神経外科)

転移性と思われる頭蓋骨 Ewing 肉腫の 1 例を報告する。症例は 4 歳の男児。既往歴には特記すべき事項は無いが、父方の祖父が血友病である。昭和 61 年 9 月頃より左前頭に無痛性腫瘤が出現。同時期より時に発熱し、左下腿に疼痛を訴えることがあった。昭和 61 年 12 月 15 日当科入院。当時神経学的に異常を認めず、左前頭部に 3 × 3 × 1 cm の硬い腫瘤を認めた。CT では左前頭部に頭蓋内外に膨隆する高吸収域及び右後頭部に頭蓋内へ膨隆する高吸収域を認めた。

脳血管撮影ではそれぞれ外頸動脈系の血管に支配されており、濃染像を認めた。全身の骨シンチでは頭蓋の 2 ケ所以外に左大腿骨及び左脛骨に hot area を認めた。当院整形外科にて、左脛骨の針生検を施行するも確診に至らず、次第に左前頭部腫瘤が増大するため、昭和 62 年 2 月 3 日、左前頭部骨腫瘍を亜全摘した。腫瘍は側頭筋肉より硬膜下にかけて存在し、一部脳実質とも血管連絡を認めた。同時に左脛骨を直視に生検したが、頭蓋骨腫瘍、左脛骨腫瘍とも、組織像は Ewing 肉腫であった。今回は、症例と共に文献的考察を含めて報告する。

62) 頭蓋骨血管腫の 1 例

妻沼 到・寺林 征 (富山県立中央病院)  
 山中 竜也・新井田広仁 (脳神経外科)  
 杉山 義昭  
 三輪 淳夫 (同 病理)

最近我々は左前頭骨に原発、主として内方に発育し、CT にて特異な所見を呈した頭蓋骨血管腫の 1 例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告する。

症例は 50 才男性。左前額部の無痛性腫脹に気づき来院。頭蓋単純写にて左前頭骨に 50 × 35 mm の境界鮮明・蜂巣状の不規則な骨透亮像、CT 上左前頭骨の蜂巣状破壊像及び頭蓋内に周囲に若干の増強効果を認める低吸収域、脳血管写で左眼窩上動脈に栄養される腫瘍陰影を認めた。腫瘍全摘出術を施行。左前頭骨内板は巣状に欠損し、板間層を中心に存在する暗赤色の腫瘤が硬膜外腔に及び、一部硬膜を破りくも膜と癒着していた。病理組織学的に、骨梁の間に一層の内皮細胞に内張りされた大小の不規則な血管腔を認め、海綿状血管腫と診断された。

頭蓋骨海綿状血管腫は全骨腫瘍の 0.2% と稀で、その多くは頭蓋冠の板間層に原発し主として外方に向い発育する。また頭蓋単純写・頭蓋単純写上特徴的な所見を呈するとの報告が多いが、CT 所見についての詳細な報告は稀である。我々の症例は、頭蓋腔内に進展し CT 上特異な所見を得た点で珍しい症例と思われる。

63) Positron Emission Tomography (PET) による放射線壊死の評価

須田 良孝・峯浦 一喜 (秋田大学)  
 古和田正悦 (脳神経外科)  
 小川 敏英 (同 放射線科)  
 宍戸 文男・上村 和夫 (秋田県立脳血管研究センター)  
 放射線科

悪性脳腫瘍における放射線壊死は再発腫瘍との鑑別が極めて困難である。今回、PET で放射線壊死の 2 例を検討し、若干の知見を得たので報告する。

症例 1: 39 歳・男性、右前頭側頭葉の malignant astrocytoma で術後に 60Gy の照射を受け、6 年後の再発時に 60Gy が追加された。照射終了 2 カ月後から左上肢の不全麻痺が増強し、X 線 CT で腫瘍の摘出部位に近接して石灰化を伴う不規則な増強域があり、生検で放射線壊死と診断された。同部分は PET で酸素および糖代謝が著明に低下し、酸素摂取率も低値であった。

症例 2: 38 歳・男性、olfactory neuroblastoma で 72Gy の照射を受け、約 1 年 4 カ月後に頸部リンパ節に転移して、42Gy の追加照射と化学療法が行われた。